

9. <下水道は世界遺産になれるか>

近年の考古学ブームで、同級生の娘2人が相次いで考古学関係の学部に進学した。しかし現実はそんなに甘くなく、カンボジアのアンコールワットの発掘・修復に参加したとき、ドロボーに根こそぎ持っていかれ急激に熱が冷めたようだ。親はこれでほっとしたようだが。

昨年、佐賀県に講演に行ったとき、吉野ヶ里公園がリニューアルオープンしたので興味を抱いて見学に行った。当時の住宅や生活、産業や意思決定機関の有様等が人形を使って復元されていた。外敵・気象等の厳しい環境ではあるが、素朴で、豊かで民主的な国家運営をしていたのではないかと推察されるものであった。

しかししかし、気になったのはライフラインの考察がないことであった。これだけの都市国家なのにトイレや排水施設、下水道に関するものが何もない！世界的には次々と古代都市国家から下水道に関する情報が出てきているのに。

下水道は今、施設の耐用年数が言われ始めた。50年を75年、100年に延命化する。しかし、下水道は都市生活をする限りもっと長持ちそして欲しいものである。せめて世界遺産になりうる500年、できれば1000年は持って欲しいものである。

古来の材料である石材、瀝青材料、レンガ、木材でもこれくらいはもつといわれている。然るに新素材であるセメントコンクリート(構造用部材として使用されて約120年)や合成樹脂(約50年)は果たして500年以上持つようになるのであろうか。下水道も世界遺産になるべくがんばらなくては。

< 三品 文雄 >

※No. 11号(2002/12/17)に掲載